

# “テキスト間関係性”をめぐる覚書

末 松 壽

## 1. 《l' intertextualité》の観念

ジュリア・クリステヴァは、『記号学——記号分析学のための研究——』<sup>1)</sup>に収録された諸論考の中で、《l' intertextualité》なる概念を提唱している。これらの論文は、1966年から69年にかけて書かれたものであって、後で取り上げる同著者の『ラモーの甥』論の口頭発表<sup>2)</sup>と大して時期の相違はない。

書記行為 (écriture), 特に文学について女史の用いる《テキスト間関係性》とは何を意味するのか。その莫大な博識, 抽象的な思考, 造語——従って晦渋さ——で定評のある女史の思想を抽出することを試みよう。

書物の言説世界の中に, 受け手 (destinataire) はひとえに言説そのものとして包括される。故に彼は, それとの関連において作家が自分自身のテキストを書くところのその別の言説 (別の書物) と融合する。こうして水平軸 (主体—受け手) と垂直軸 (テキスト—コンテキスト) とは合致して, 一つの重大な事実を明らかにする。即ち, 語 (テキスト) とは, 幾つもの語 (幾つものテキスト) の交叉であって, そこに少くとももう一つの語 (テキスト) が読まれるのである<sup>3)</sup>。

この概念の構築に際して多くを負うミハイル・バフティンの対話的テキスト, 或いはテキストの対話性の考え方を紹介しながら, 更に女史は書いている:

あらゆるテキストは引用のモザイクとして構成される。あらゆるテキストは別のテキストの吸収であり変形である。相互主観性 (intersubjectivité) の観念の場所に, 「テキスト間関係性」のそれが据えられる。そして詩的言語は少くとも「二重のもの」(double) として読まれる<sup>4)</sup>。

あらゆるテキストについて言えることは, 当然, 文学, そして特殊的に詩のテキストについても言える。

女史はまた, 別のところで, ソスユールをもその先駆者として挙げている。

詩的所記は他の言説所記に送り返す。詩的言表においては幾つもの別の言説が読まれうる。こうして、詩的所記の周囲に多様なテキスト空間が創られる(…)我々はこれを《テキスト間関係の》(*intertextuel*)空間と呼ぼう<sup>6)</sup>。

かくて詩のテキストは、二つ以上の互いに対抗関係にある《コードの交叉の場》ということになる。そして、

詩的言語における幾つもの外的言説の交叉(そして破裂)の問題は、その『アナグラム』においてフェルディナン・ド・ソスユールによって指摘された。

ソスユールの用いる《パラグラム》(*paragramme*)なる観念から発して、我々は詩的言語の作働の根本的特殊性を確立しえた。それを我々は《パラグラマトィスム》(*paragrammatisme*)なる名前のもとに指示した(*Ibid.*)。

後者は《テキスト間関係性》の観念に重なってくる。女史はそれを次のように言い換えているからである。「即ち、他方《一つの》意味《によって》中心を定められたものとして《現れる》詩的メッセージの中における複数テキスト(意味)の吸収である」(*Ibid.*)。対話性とパラグラムとの源泉における交錯については他に明示的な言明もある。詩的言語の二重性こそ「ソスユール(『アナグラム』)とバフティンから発して構築されるこのパラグラム記号学の最小の辞列(*séquence*)であるだろう」(p.150)。

バフティンの利用法については措くとして、ソスユールからクリステヴァにかけては観念内容は幾重もの限定を破って拡大される。ここで、一般言語学の講義(1907—1911)にほぼ平行的になされたジュネーヴの学者の膨大な研究(ノートは大小様々、ざっと百冊をこえる)から『記号学』への距離にかかわる若干の点のみを指摘しよう。1906年から1909年にかけてとられたというソスユールのノートの抜萃はスタロバンスキーの解説つきで公刊されている<sup>6)</sup>。まず『語の下の語』より、サトゥルヌス詩の一行に関するソスユールの註解を復原する。

### *Taurasia Cīsauna Samnio Cēpit*

これは《アナグラム》詩であって、完全に *Scīpio* という名前を含んでいる (*cīpīā* の音節に、また *Samnio cēpit* の *S* に。この *S* は *Scīpiō* なる語がほとんどそのまま再来するグループの頭音である。 *cēpi* の *Cīsauna* の *cī* による是正) (*Ibid.*, p.29)。

パラグラムとは、このように詩句の中に、人名とか神の名とかが織り込まれる現象である。詩句はその外示的意味においては勿論、更に、諸要素を刻印したいわば身体中でその名前を遍在させ反復するのである。だが注意しよう。ソスユールにおいては、

1° それは文字ではなく音声の上での現象である (cf. pp. 27, 31).

2° 隠されかつ顕わにされるのは語 (mot) か名 (nom), 特に固有名である (pp. 23, 29). それはテーマとかテーマ語 (mot-thème) と呼ばれる。それが音節または音素 (p.40) に分析され, 更に, 分散した「音声上のパラフレーズ」 (p.134) として詩句の中に実現される<sup>7)</sup>。

3° 模索的研究の途上で, 呼称はいくつも提出され, その都度, 既に用いた術語の意味が差異において規定される。引用文では anagramme だが, 他に hypogramme, paragramme, paratexte (p.30-32), cryptogramme (p.78) 等も出現する。いずれにせよ, それは関係概念であって, テーマ語と詩句との関係性を指示する。例外的には (詩句との関係において) テーマ語を意味することもある (pp. 53, 55)。

4° 研究対象は, ホメロス, ラテン詩を始めとするインド・ヨーロッパの古詩に限定される筈であった (p.27, p.36 sq). しかし, まず散文が入ってくる (p.115 sq). それどころか, 調査が進むにつれてヒボグラムは到る所に見えてくる。研究者は不安になる。それは作文法の秘伝か, それとも偶然, 確率の問題なのか。同じ現象は 15 世紀のポリツィアーノ, ギリシアのエピグラムの 17 世紀になされたラテン訳にも発見される。そしてこともあろうに, 同時代者によるラテン詩にすら (p.148 sq)! その手法をめぐって見事な理論を築きつつあった人跡未踏のアナグラム研究は, かくして確証に至らないまま打ち切られる。

さて, クリステヴァによる観念の拡大は, 以上全ての規定に対して発揮される。即ち,

1° “-gramme” は, ソスユールの注意にもかかわらず, まさに文書に適用される。

2° 語 (と文) ではなく, 先の引用が示すように, 言説 (と言説) のレベルに及ぶ。そしてそれは《既に》存在するテキストである。

3° 当惑させることだが, 『記号学』は, 新たに産出されるテキストを明白に《パラグラム》と呼ぶ (後にみるロートレアモンの例, p.256 参照)。1° “-gramme” と同じく, ソスユール自身による語の, 語源的意味に反する使用の結果であろう。

4° フランス文学に応用されるどころか, それこそまさに近代詩の特質とされる。この応用はスタロバンスキーによる拡大の要請に平行する。彼はシャトールブリヤン, ボードレル, ヴアレリーにおける例を指摘している。但し, 註釈者は, ソスユールに従って「語の下の語」を固有名詞か少くとも一語に限定す

る (p.158).

こうして、パラグラムからパラグラマトィスムにかけて、原料と加工に等しい変貌が現れる。語の意味のこの組織的な変様操作のうちに、女史による記号戦略の一端をうかがいみることができる。それは一種の(毛澤東の意味での)殲滅である。なぜなら、略奪された武器は、改造されて、当のソスュールが代表する音声中心主義(既に前頁1<sup>o</sup>を見よ)に向けられるであろう。そしてまたこの操作は、女史における書く行為の《根本的特殊性》、変形生産 (production transformatrice) の一例そのものでもであろう。

アナグラムの理論に興味をもち、それを応用する人々「文学的創造の観念を拒み、生産のそれを代置する理論家達」に対するスタロバンスキーの批判は、上に指摘した概念拡大とはやや別の角度からなされている (cf. p.64)。唯、彼の註解の中には、クリステヴァの立場をいくらか示唆するものもある。例えばこの文：

詩句のすぐ背後に何があるのかが問われる時、答は創造する《主体》ではなく誘導する(語)である。フェルディナン・ド・ソスュールが芸術家の主観性の役割を抹消するところまでいくというのではない。が彼には、それは口実としての前テキスト (pré-texte) 通過の後には自分のテキストを産出できないと見えるのである (p.152)。

しかし『記号学』の文章に戻ろう。複数テキストの融合・交叉、あるテキストの他のテキストによる吸収、単一あるいは複数テキストの別のテキスト内での破裂には様々のあり方がある。新たな言説は《下にある》言説に奉仕しそれを顕揚するのか。

故に、文学記号学の任務とは、テキストの対話空間における語(辞列 séquences)のいろいろな接合様態に対応する形式 (formalismes) を見出すこととなるであろう (Ibid, p.146)。

これを著者は、古代ギリシア・ローマの諷刺文メニッペ (ménippée), アントワーヌ・ド・ラ・サルの『ジュアン・ド・サントレ』(1456), ロートレアモンの『マルドロールの歌』及び『詩』, フィリップ・ソレルスの『数』等について試みている。ロートレアモンを例にとれば、その『詩』の断片における「先行する作家達の具体的でほとんど引用されるテキスト」(パスカル, ラ・ロシュフコー)との接続には三つの型があるという。a「全面否定: 外的辞列が完全に否定され、参照されるテキストの意味が転倒している」場合、b「対称的否定: 二断片の論理的全体的意味は同一である」が、「パラグラムは参照テキストに新しい意味を与える」<sup>9)</sup>場合、c「部分的否定: 参照テキストの唯一の部分が否定され

る」場合である (p.256-257)。

以上の否定様態の記述と呼び名にはいささかの問題もあろう。先づ、著者は、この時点では矛盾や対立も区別せずに否定の内に入れるとしている (p.225 note)。《反対》も加えて(アリストテレス、『カテゴリー論』, 11 b 15-13 b 35 参照), それは整理する必要があるだろう。実際それを著者は、続いて、また他のところで、集合論を用いて試みている (cf. p.126 sq)。第二に、より根本的に、そこでは、否定性の作用する場、レベルが一定していない欠陥がある。a)ではそれは統辞と意味の双方に及び、b)では意味に(それに恐らくは論理にもかかわることが示唆されている),そしてc)では統辞に及ぶからである。否定性と文法,論理,意味との関係は、恐らく想像以上に複雑な困難をまとっている。

ともあれ、このような「言説間の対語の手法」は文学史にそって常に見られるものの、特に近代の詩のテキストについては《根本的法則》であるという。なぜなら「それはテキスト間関係空間の他のテキストを同時に吸収しかつ破壊することによって作られる」からである。ド・クインシー／ポー／ボードレル／マラルメを結ぶ詩的実践の例は最も驚嘆すべきものである。だが、

網の目は増大される。しかしそれは常に同じ法則を表現するだろう。即ち、詩的テキストは別のテキストの同時的肯定と否定の複雑な運動の中で生産される (p.257)。

以上が《テキスト間関係性》の思想の極く簡単な要約である。ここに、実証主義文学史が好んで扱ったいわゆる影響、或いは典拠 (sources) —そこに人々は無批判的に因果性を仮定した—の問題に対する一つの新しい見方があることは言うまでもない。テキストの生産は、それに先行し、又は共時的に存在する他のテキスト群を《コンテキスト》としてしか実現されないというラディカルな観点である。もし汎パロディ主義とでもいったものがあれば、この立場に近いであろう。実際、ロートレアモンの例はどれもパスカルカラ・ロシュフコーのもじりである。但し、パロディを規定するグロテスクとかブルレスクの観念は、この思想にとっては必ずしも本質的ではない。替え文はその一種でしかないであろう<sup>9)</sup>。そしてまた一つの新しい対応のし方を見ることもできる。テキスト間の対話の諸様態を形式化し理論化することを以って文学記号学の一つの任務と規定するからである。

しかし文学を一つのコミュニケーション活動として把握する場合、疑問もある。実際、最初の引用文でみるように、受信者はひとえに《言説そのもの》としてテキスト内に包括されてしまうものかどうか。ここで故意に《身分》

(statut)の曖昧なものを例にとれば、書翰 (ital. *lettera*) はどうなのか。例えばバンヴニストはこれを「口頭談話を再生し、或いはその言い回しや目的を借りる文書」<sup>10)</sup>の一つとしている。つまりテキストの一種である。そこにおいても複数テキスト（そして談話）の交錯が語られうることは論を俟たない。そもそも談話が二人称に向けて発せられながらも複数の外的談話（及びテキスト）を吸収しうるのと同列である。要するに人が、習(做)った、習得(*ap-prendre*)した言葉で話し文字で書く以上、そこから発してそれに対する働きかけ（肯定と否定の複雑な操作）を行いつつ話であれ書であれ実践するのである以上、たとえそれにより無限の言説やテキストが産出可能であるとしても、音声言語と文字言語の全文化が何らかの形で常にこの行為に介入してくることは当然である。その意味ではクリステヴァの主張は自明の理であろう。しかしなぜこの現象を書く行為にのみ限定するのか。これが第一の疑問である。

ところで人は、実在する他者、発話する限りで《主体》となる者を名宛人として手紙を書く。それと文学 (*letteratura*) とは、単に語源上の親縁性にとどまらず、実践においても構造的関連を有するのではないのか。ヴァレリーを転用すれば、「手紙とは文学である」(*Une lettre est littérature*<sup>11)</sup>) とすら言えるのではないか。少くとも、個人的書翰と虚構作品の間には、それぞれ微妙な差違をもった幾種類かのテキストが存在する。例えば公開状、自伝、そして献辞を印刷した小説…ここで、ルソーとディドロから数例をあげてみよう。

普通には《あなた》と呼ぶウードト夫人に宛てながら、《おまえ》と呼んで恋を語り、この代名詞転換によって非現実化（即ち文学化）されてしまった奇妙な《手紙》がある。伝達を拒む自閉的な《告白》。ルソーはそれを発送しない<sup>12)</sup>。更に、先づ卒直さについて語るという主題の上での類似のみではない。その追憶と遺言、そして予言の調子においても、そして文字においてすら『告白』とのテキスト間関係性を構成する同一人物宛書翰も残っている<sup>13)</sup>。小説『修道女』の起源となったクロワマル侯爵を相手とした韜晦は有名である。クロワマルの返書が真正の書翰なら、彼に宛てたディドロの《書翰》は既に虚構テキストではないのか。『聾啞者に関する書翰』(1751) はバトゥ神父に宛てた公開状の形の論文であるが、そこでは、そのモデルであるコンディヤック(1746)が、ディドロに続くルソー(1755)と共に一即ち三作品はテキスト間関係空間を構成する―「説話を特色づける」(バンヴニスト)アオリスト(単純過去)で語る言語の起源を、ディドロは「談話を規定する」完了時制(複合過去)で書いている。最後に、『告白』ジュネーヴ草稿の「はしがき」中の《あなた》は何ら

かのテキストには還元できない。「あなたが誰であれ…」と書く時、ルソーにとってそれが誰になるかわからないのであるから。以上が第二の疑問である。共同テキスト性の観念が、コミュニケーションを支える共同主観性のそれを追放してしまいうるのかどうか。談話を《再生》するテキストがある時、更に談話から文学にかけて両者を連絡するところの微分的な差違を有する中間型態が存在する時、談話から独立したテキストとは一体どこから始まるのか。『記号学』はまず、テキストなる用語の外延を明確に限定すべきであろう。

だが、女史がその書において一貫して論駁しようとしているのが、まさにこれらの疑問の前提になっているコミュニケーションとしての書記行為の思想であり、かつまた相関的に、主体、相互主観性の理論なのである<sup>14)</sup>。著者は書く、テキストとは、他の主体との関係で構築される主体の言説ではない。そのような考え方は、主体と他の主体とをテキストに先行するもの(entiés)として前提し、また音声コミュニケーションの鎖に服従している<sup>15)</sup>。

受け手がテキスト内に解消するばかりではない。それはまず書き手についても言われる。フォルマリズムと構造主義とを超克して、テキストを音声言語の法則と機能から自律した実践・生産行為、そして何より生産性(productivité)として把握すること、これが『記号学』の主要テーゼである(pp. 76, 113)。そこにおいて書く《主体》は消失し、書く行為あるいはテキストそのものとなる。

作家の対話者とは、故に他のテキストの読者としての作家自身である。書くのも読むのも同じ者である。その対話者がテキストである故に、彼自身、書き直されつつ再読されるテキストに他ならない(p.170)

と女史は断言してさえいる。ここに至って、あらゆる主体は消失し、テキスト世界に自閉したテキストの相互関係性だけしか残らないことは言うまでもない。この《対話》が、もはやバフティンのそれからも恐らく程遠いことは想像に難くない。以上指摘してきた関心は、記号論の様々の領域を論ずる本書の至る所にみられる<sup>16)</sup>。

## 2. 二つの事例

ここで視点を変えて、相互テキスト性の観念にかかわらずには措かない、筆者が出会った二つの奇妙な例を挙げることによって、更に考察をすすめよう。それはいずれも、クリステヴァの『ラモーの甥』論の一つのページを契機として現れる。話題をこの論文に変えよう。

言語における主体 (sujet) をめぐる考察の歴史を要約する冒頭の部分で、クリステヴァは哲学、言語学、精神分析学のそれぞれの観点について触れている。『記号学』の関心が依然として続いていることに注目しよう。ところで、哲学で挙げられるのは奇妙なことだが、デカルトとフッセルのみであって、しかも後者は3行で片付けられる。それに出版(版、年代)を明記せずに註釈で引用される『方法叙説』第四部の30行の文章には、句読符号のつけ方やことわりなしのイタリック体の使用(これは既に原テキストに加え書くことではないのか)は別にしても、大小様々の実に7ヶ所の転載誤記がある<sup>17)</sup>。

さて、主体の問題はどのようにして言語学の分野に入ったか。

言語学においては、主体の問題は形而上学や心理学の問題であるとみなされて、いずれにせよ言語科学の構築にとって危険なものともみなされて、長い間わきにおかれてきた。言語科学はまずその領域を定めるべきであって、他の学問の内に解消してはならなかったのである<sup>18)</sup>。

発話主体の問題は記号論と共に言語科学の内に入ったこと、まずチャールズ・モリスが恐らく始めてこれを扱ったことを女史は指摘する。そして「モリスの後で、バンヴニストが再び問題をとり上げる」(p.159)と言う。バンヴニストの議論を2ページ半にわたって紹介・解説し、その後女史はヤコブソンにも言及する。そして、それらとは異なるものとして精神分析学、特にラカンによって解釈されたフロイトの学説を要約する。女史が『ラモーの甥』における人称の諸問題を分析するのは、バンヴニストの理論もだが、主としてこの最後の観点からである。

バンヴニストの学説紹介の最後をみよう。そこでクリステヴァは、言語学者の論文《言語における主観性について》の要約を行っている。これはいうまでもなく、テキスト間関係性の格好の一例となる筈である<sup>19)</sup>。

クリステヴァの文章及びその《コンテクスト》となるバンヴニストの文章は以下の通りである。

Kristeva, *art. citée*, p. 161  
... 《Lui》 ne renvoie pas à une personne, mais se réfère à un objet placé hors de la locution (1). Pourtant la troisième personne n'existe que par opposition à la première personne, 《je》 du locuteur qui, l'énonçant, se situe comme non personne<sup>15)</sup> (□). Lorsque 《je》 dit 《lui》, il se situe lui-même comme non personne, l'énonciation de 《lui》 est une sorte de pas-

Benveniste, *op. cit.* p.265

On discernera mieux encore la nature de cette 《subjectivité》 en considérant les effets de sens que produit le changement des personnes dans certains verbes de parole (1). Ce sont des verbes qui dénotent par leur sens un acte individuel de portée sociale: *jurer, promettre, garantir, certifier*, avec des variantes locutionnelles telles que *s'engager à... se*



sage à l'anonymat du 《je》(イ)。La forme *il*... tire sa valeur de ce qu'elle fait nécessairement partie d'un discours énoncé par 《je》<sup>16</sup>, mais elle est caractérisée comme non personne et donc se place en quelque sorte hors des instances de discours, introduisant l'objectivation dans la subjectivité même du langage (ニ)。

A la suite de l'article de Benveniste, qui date de 1956, Roman Jakobson a formulé plus explicitement et avec plus de détails, la différence entre énonciation et énoncé, et la situation du sujet à l'égard de cette distinction<sup>17</sup>(ホ)。

15, 16は著者による *P. L. G.*, p. 265への参照。17は同じく Cf. 《les Embrayeurs, les catégories verbales et le verbe russe》, in *Essais de linguistique générale*, éd. de Minuit, 1963 なる註釈。(イ)〜(ホ)は筆者による。

*faire fort de*... (2)。Dans les conditions sociales où la langue s'exerce, les actes dénotés par ces verbes sont regardés comme contraignants (3)。Or ici, la différence entre l'énonciation 《subjective》 et l'énonciation 《non subjective》 apparaît en pleine lumière, dès qu'on s'est avisé de la nature de l'opposition entre les 《personnes》 du verbe (4)。Il faut garder à l'esprit que la 《3<sup>e</sup> personne》 est la forme du paradigme verbal (ou pronominal) qui ne renvoie *pas* à une personne, parce qu'elle se réfère à un objet placé hors de l'allocution(5)。Mais elle n'existe et ne se caractérise que par opposition à la personne *je* du locuteur qui, l'énonçant, la situe comme 《non-personne》(6)。C'est là son statut (7)。La forme *il*... tire sa valeur de ce qu'elle fait nécessairement partie d'un discours énoncé par 《je》(8)。

(1)〜(8)は筆者による。

## 1) 人称／非人称

まず些細な事実から指摘しよう。クリステヴァは「1956年のバンヴニストの論文に続いてローマン・ヤコブソンは…」(ホ)と書いている。ところが、女史が前文段で参照した論文は実は1958年に発表されている<sup>20</sup>。他方、ヤコブソンの論文は、部分的には1950年に、全体としては1957年に発表されたものである<sup>21</sup>。従って順序は逆になる。しかし重要な事柄は別にある。

第一文段において、女史は大体において言語学者を引用またはパラフレーズ (*paragraphein*) しているにすぎない。例えば(イ)―(5)、(ロ)―(6)、(ニ)のプロタシス―(8)。もっとも(5)の《allocution》「話しかけ」(*ad-loquor*)が(イ)では《locution》(*loquor*)に変更され、発話行為の力動性、それがそこにおいて行使される人称性の状況、ひいては相互主観性が既に脱落していることには注意を要する<sup>22</sup>。文章(イ)のみが例外とみえる。といってもこれは(ロ)のやや具体的な説明であろう。女史は言語学者の説を更に先へと推論していると見える。しかし実際はどうか。命題(イ)―その重大さに本人は気付いているのか、その意味内容の可能性が一体信じられるのか―は少くともバンヴニストによっては正当化され得ない。(イ)がそこから産出された不可解にもオープン・クォーティション・マークをもたない(ロ)と他方(6)との間には、ただ一語のしかし異様な相違がある。

話者である人称《私》*je*は、それ（三人称）を言表することによってそれ（*la*）を非人称として位置づける（バンヴニスト。強調点筆者）。

話者である第一人称《私》*je*はそれを言表することによって自己（*se*）を非人称として位置づける（クリステヴァ。強調点筆者）。

（文脈からして、*il se situe* の *il* は従属節の主語《*je*》でなければならない）。

これがクリステヴァによる《引用》である。改竄？誤読？そこに誤植の可能性はない。女史はその命題を（*je*）によって更に敷衍する労をとっているのだから。この《*lapsus*》は精神分析されるべきでもあろう。実際、《私》が《私》について語り続けるという絶対唯我論、「厭わしい自律性」（アンリ・ミショー）に留まるか、せいぜい、《人称性》の範疇内部に全ての言表を制限するという我と汝の相互ナルシズムを維持するのではない限り、それは非人称に転落することになろう。我や汝の《何か》（それは必然的に《三人称》で、従って非人称で示される）について語ってすら。それにバンヴニストの《非人称》とはクリステヴァのいう《無名性》*anonymat*と即座に交換できる程度のものなのか。少くともこの大胆な命題は元テキストの発展ではなく逸脱である。女史はその引用（？）によってのみこの不可解なテキストを生産し得た。そこに相互テキスト性の否定様態の一つを読みとるべきであろうか。女史における《約説》の文脈（cf. p. 157）からして、またかかる誤読が女史には容易でもある（デカルトの例）ことからして、これは一つの事故と判断すべきであろう。

しかしこれは本当に《*lapsus*》なのか。筆者には確信がないことを白状する。というのは、（*je*）が『記号学』の主体否定のテーゼに合致することは明らかであり、従って、優れて主体と人称を示すべき《*je*》の内部への非人称性の侵入を、たった一語の手直しによって言語学者一談話（*discours*）における人称性の原理を主張するバンヴニスト自身に言わせうるとしたら？（*je*）を引用とみた場合には、余りにも愚かしいそのような権利は誰にもないことは言うまでもない。しかし、クォーティション・マークの不完全さは、それが引用ではないという口実も与えるのである。更に、文脈や意味内容すら捨象して、女史における純粋な能記の操作に注目する時（実際、《他》と《同一》を弄ぶ—「ヘーゲルのベスト」（エンゲルス）の徴候—そこに明確な意味を把握できるとしたら大したものだが）次の文章も『記号学』には見出される。レーモン・ルッセル論（1967）の一節：

Le sens déçu et rétréci est compensé par le vraisemblable rhétorique qui fait partie intégrante du mécanisme du même sens : son “autre” indivisible, absent de la surface explicite, il est le sens même. Au moment où il (sens-rhétorique) le (se) déçoit, il

l'(s) amplifie (*op. cit.*, 《La productivité dite texte》, p.223).

テキスト間関係性の、これに劣らず面白いもう一つの事例に移ろう。

## 2) 事実確認的発言／行為遂行的発言

バンヴニストの文章中、最初の数行(1～3)、即ち、列挙される動詞と動詞句の範例、それらが社会的拘束力をもつ個人的《行為》を示すという指摘、更に、一人称の場所に他の人称を代入する転換テストの提案は、これが、オースティンがその講義<sup>23)</sup>において取扱ったある種の動詞とその分析に全く等しいことは、今日なら誰でもわかる。つまりこれは彼のいう《行為遂行的発言》*performative utterance*の理論である。このことは、引用文に続くバンヴニストの説明をみれば一層強い推定となる。

ところで「私は誓う」*je jure*は、それが自己を「私」(je)と言表する者の上に誓いの現実性を置くという事実によって独特の価値をもつ形である。この言表行為は一つの《遂行》(*accomplissement*)である。「誓う」ことはまさに「私は誓う」なる言表行為のうち存する。それによって自己(Ego)は拘束される。「私は誓う」なる言表行為は私を拘束する行為そのものであって、私が遂行している(*accomplis*)行為の記述ではない。「私は約束する」「私は保証する」ということによって、私は実際に約束し保証するのである(*Ibid.*, p.265).

著者がイタリック体で強調する《遂行》(する)とは、《performative》からくる用語(訳語)であるとすらみえる。ところで、バンヴニスト自身も他の章でモリスに言及している以上<sup>24)</sup>、女史がこれをバンヴニストの前におくことはそれなりに納得がいく。しかし、何らかの資格でオースティンも挙げるのが正しいのではないか。哲学者としてフッセルの次におくか、或いは思い切って言語学の領域に入れるか。但し、いずれにせよ、バンヴニストの《前》に位置づけることは上の同一性の判断からのみしては軽卒である。どちらが先行するのか、従ってどちらがもしかしたら《コンテクスト》になるのかという煩わしい問題があるからである。

バンヴニストの論文(1958)は、オースティンの講義録(1960)よりも先に発表されている。しかしオースティンは、生前、何らかの形で行為遂行的発言／事実確認的発言をめぐる考察を公にしなかったであろうか。バンヴニストは、後に発表する《分析哲学と言語》(1963)の中で、ロワイヤーモンにおけるオースティンの報告を紹介している<sup>25)</sup>。オックスフォードの哲学者によれば、行為遂行的発言は、

固有の機能をもち、一つの行動を行うことに役立つ。そのような発言を行うこと、それ

はその行動を行うことである。おそらく、少くともそのような明確さをもってはいかなる他の仕方によっても遂行されえないであろう行動を (P.L.G., I, p.269 における引用)。

そのような発言として、オースティンは一連の動詞、命名する (baptiser), 陳謝する (s'excuser), あつらえ望む (souhaiter), 忠告する (conseiller) を用いた直説法, 現在, 一人称, 単数, 能動態の例文を与えている<sup>26)</sup>。そして更に説明する。

私は約束する《je promets de…》と言うこと, このいわゆる遂行的行為を表明することは, それこそ約束をなす行為そのものである (Ibid.)

哲学者による「約束する」, 言語学者における「誓う」(後者は勿論「約束する」の例も挙げている) のパラディグムの相違を別にすれば二人のテキストは余りにも対応する。このような出会いは筆者の先の《鑑定》を強めることを許すだろう。更に, バンヴニストの上記論文において, 記述としてでなく行為達成としての言語使用のテーマは, 高度に一般言語学的な, 即ち, 個別言語のではなく彼のいわゆる《人間の能力》《人間の普遍・不易の特性》たる *langage*<sup>27)</sup> の問題としての主観性の検討—これが全体の約3分の2 (pp.258-263) を占める—に続いて, かなり唐突に, いわば一つのトピックとして介入してくる (pp.263-266) という事実もある。しかもフランス語という個別言語を例として。それが諸言語においても合致するという保証はまだないのであるからこれは奇妙である。

しかし著者は《言語における主観性について》が, オースティンからの如何なる借用もなしに書かれていたことを明言するであろう。遂行的発言を見分ける規範を前にした哲学者の困惑, またこの種の発言を無効ならしめる様々の《不幸な》事情についての指摘を紹介したあと, 彼はオースティンが示した言語事実に「多大の興味を抱いている」という。

筆者自身, このタイプの言表の特殊な言語学的状況を独立した仕方で指摘したことがあるだけになおさらである。数年前, 言語による言表作用の主観的形態を記述しながら<sup>3)</sup>, 筆者は簡単に, 一つの行為である《私は誓う》と情報にすぎない《彼は誓う》の間の差違を指摘した。《行為遂行的》とか《事実確認的》なる術語はまだ出現してはいなかった。けれどもそれは確かに定義の実質ではあった<sup>28)</sup>。

バンヴニストはこのように自分の発見の独創性を主張する。もっとも, ロワイヨーモン学会がいつ開催されたのかという疑問が残る。「学会が行なわれた年代がこの出版物 (=『ロワイヨーモン冊子』) のどこにも現れていないことは遺憾である」と彼が冒頭で註記する (p.267 note 2) のは, 両者の間に《priority》の, また場合によっては, 彼による剽窃の疑いの問題があるからに他ならな

い。これについては、オースティンの『哲学論文集』第二版の編集者の証言がある。アームソン、ウォーノックによれば、

オースティンの『哲学論文集』が初出版された1961年以来、彼によるなお三篇の論文が印刷出版された。(…)第三のものは“Performatif-Constatif”であって、これをオースティンは1958年3月のロワイヨーモンにおける(主として)英仏学会で発表した<sup>29)</sup>。

バンヴニストの論文は同じ年の『心理学報』7—9月号に初出となっていることは先に見た。従って、彼がオースティンを既に知っていた可能性はあるといえる。彼による借用を暗示する「E. バンヴニストはこの(=オースティンの)主張を自分なりに再びとり上げた」と評価する人々もいる<sup>30)</sup>。ただ、上にみた彼の言明を信ずるならば、両者は、技術用語の発明は別として、互いに全く知り合うことなく、英・仏両語のそれぞれの使用のある比肩されうる側面(実際オースティンはフランス語の問題としても同じ分析を示し得たのである)について全く類似の発見を行ない、全く同様の範例を挙げ、全く同じ判別テスト(人称転換)を提出し、要するに全く類似のテキストを産出していたことになる。

第一の事例は、著者が他の著者の文献を紹介するに際して、引用・要約し、また敷衍・説明する過程で生じた恐らく一つの事故である。この事故のために、著者は元テキストを《吸収》しているつもりで、実は、その否定というよりむしろ全く異なるものを産出してしまふ。誕生の観点よりすれば、テキスト間の関係において把握されるパラグラム(クリステヴァの用法)であろうものが、実は《hétérogramme》に他ならない。それは元テキストからは論理的に由来し得ない。だが同時に、元テキストなくしては存在し得ない異様な怪物である。これに劣らず奇妙な、しかし不可能でもないもう一つは、複数の著者が、全く別の思索の道を経て、同じ主題をほとんど同じ例を用いて同じように分析し、ほとんど同じテキストを生産してしまう場合である。それはいわば電気用語という短絡(court-circuit)である<sup>31)</sup>。生産の観点からは、テキスト間関係性の概念の適用が無効であるべき二つのテキストが、読者にとってはしかし、否定することのできない関係において出現するのである。

クリステヴァの提唱するこの概念は、1°著者自身バフティンについて主張したように、あらゆるテキスト(たとえば言語学や記号学のそれ)に適用できること、2°産出の原料となるコンテキストには、作家自身の先行テキストも入れるべきであること、3°それは著者の専ら考える生成の場面をこえて、読みのそれにまで拡大されるべきであろうこと。消費を前提としない生産と同じく、

他者による読みを予想しない書き行為とはみじめな自律性ではないのか。(ここで再び受け手の問題がでてくる)。その時これは、少くとも部分的に交叉読書(lecture croisée・cross reading)に重なることになり、そこに一つの基礎概念を提供することにもなろう。以上の点を筆者は確認し、或いは提案したい。

## 註 釈

- 1) Julia Kristeva, *Sēmeiōtikē* — *Recherches pour une sémanalyse* (Éd. du Seuil, 1969).
- 2) J. Kristeva, 《La musique parlée ou remarques sur la subjectivité dans la fiction, à propos du *Neveu de Rameau* 》, dans M. Duchet et M. Jalley, *Langue et langages de Leibniz à l'Encyclopédie* (Séminaire de l'E. N. S. de Fontenay), 10/18 (U. G. E., 1977). セミナー自体は 1968 年に《続く》2 年間に行なわれたという。デュシェ, ジャレによる「緒言」, p.7 参照。
- 3) J. Kristeva, *Sēmeiōtikē*, 《Le mot, le dialogue et le roman 》, p.145.
- 4) *Ibid*, p.146. 参考としてパフティンの『ドストイェフスキー詩学の諸問題』(1963), 『フランソワ・ラブレの作品』(1965) が挙げられる (p.143 note). 「語・対話・小説」なるこの章は、それ自体「パフティンの書物から発して書かれたもの」であり、今問われている概念の既に一つの応用例でもある。
- 5) *Ibid*, 《Poésie et négativité 》, p.255.
- 6) J. Starobinski, *Les mots sous les mots, les anagrammes de Ferdinand de Saussure* (Gallimard, 1978). 以下参照はこのテキストによる。クリステヴァによる要約と解釈は《Pour une sémiologie des paragrammes 》, *op. cit.*, p.175 参照。これはスタロバンスキーによる雑誌での発表の一部 (*Mercure de France*, fév. 1946; *Tel Quel* 37, 1969) によっている。なお、ソスユールのアナグラム研究, その理論, それが開く展望については、他に, R. Jakobson, 《La première lettre de F. de Saussure à A. Meillet sur les anagrammes 》, p.190-201, *Questions de poétique* (Seuil, 1973); L.-J. Calvet, *Pour et contre Saussure*, p.33-46 (Payot, 1975); 丸山圭三郎『ソシユールの思想』, p.169-177 (岩波, 1981) 参照。
- 7) テーマ語は、やや時代を降れば形容詞, 地名, 普通名詞にまで及ぶ (p.61)。また《複合アナグラム》においては, 10 行程の言説の下に, 簡単などはいえ別の《言説》が見えることもある (p. 65-79)。
- 8) 上記, 概念拡大 3° の例文である。
- 9) もっとも女史は, 対話性と「近代のある種の」パロディ文学とは「根本的にかつ明白に」区別されると断言している (p.152)。
- 10) É. Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, I, ch. XIX, p.242 (Gallimard, 1966). (以下, これは *P. L. G.*, I. と略記する)。伝統的な話し言葉／書き言葉の区別の代りに, 彼は談話 (discours)／説話 (récit) のそれを置くのである。
- 11) P. Valéry, *Monsieur Teste*, 《Lettre d'un ami 》, p.53, dans les *Œuvres* II (Gallimard, 1960). 転用という所以は, ヴァレリーのこの文において《文学》とは精密ならざ

るものの謂であるからである。

- 12) *Correspondance générale de J.-J. Rousseau*, III, N° 381 [1757], p.89-96 (Armand Colin, 1925); 『ルソー全集』第十三巻, p.381-389 (白水社, 1980)。なお、原好男氏による訳註参照。またカフカの『父への手紙』もある。
- 13) それぞれの冒頭の文を見よう：  
《 Je forme une entreprise qui n'eut jamais d'exemple, et dont l'exécution n'aura point d'imitateur》 (*Confessions*, O. C., I, p.5, Gallimard, 1959).  
《 Je commence une correspondance qui n'a point d'exemple et ne sera guère imitée》  
*Correspondance générale*, III, N° 383 (le 13 juil. 1757), *op. cit.*, p.101-102; 『ルソー全集』第十三巻, p.418-420。この手紙の正確な日付および発送されたか否かについては複数の説がある。Dufour及び原氏の訳註参照。
- 14) バンヴニストにとっては、「相互主観性の条件 (…)こそが言語コミュニケーションを可能ならしめる唯一のものである」, *P. L. G.*, I, ch. XXI, p. 266。また ch. XX, p. 254 参照。
- 15) Kristeva, *op. cit.*, 《Le sens et la mode》, p.76。これはバルトの『モードの体係』(1967)を手がかりにした章である。
- 16) 身振り言語を考察する章《Le geste, pratique ou communication?》, pp. 91-93, 102, 112。小説における言表行為を扱う《Le texte clos》, p.113。レーモン・ルッセルを論ずる《La productivité dite texte》, p.224...
- 17) 該当箇所の文脈を復原し、括弧内に女史による《読み》を示す。(イタリック筆者)。  
1) pendant que je voulais *ainsi* (aussi) penser que tout était faux,...2) mais que je ne *pouvais* (voulais) pas feindre, pour cela, que je n'étais point ;...3) encore que tout le reste de ce que j'*avais jamais imaginé* (avais imaginé) eût été vrai,...4)5) j'étais une substance dont toute l'essence *ou* (de) la nature *n'est que* (est) de penser,...  
6) l'âme par laquelle je suis ce que je suis, est entièrement *distincte* (distinct) du corps,...7) elle ne laisserait *pas* (point) d'être tout ce qu'elle est (Kristeva, *art. citée*, p.203-204)。テキスト科学の専門家によるテキストへのこの無感覚には驚く他ない。古典、しかもデカルトの文章がかくも無残な損傷を受けるのをみれば、精密の魔に憑かれた者なら憤慨してとび上がるだろう。*Discours de la méthode*, éd. critique de É. Gilson, p.32-33 (Vrin, 1925; 4° éd. 1966); *Œuvres et lettres*, p.147-148 (Gallimard, 1953); *Œuvres Philosophiques*, I. p.602-604 (Garnier, 1963) 参照。なお3)の *avais imaginé* という誤植はプレイヤード版もおかしている。また女史による句読符号のつけ方は、唯一ヶ所を除けばこの版のテキストのそれに合致する。
- 18) J. Kristeva, *art. citée*, p.158。通時の問題と結びついた形で至る所に現れているが、明示的には副次的とされる、ソスニールの『講義』における《パロルの言語学》の微妙な位置を考えよう。
- 19) 小論において筆者は、《sujet》を主体と訳し、《subjectivité》は主観性と訳していることをことわっておく。
- 20) バンヴニストによる訳註：《*Journal de Psychologie*, juil.-sept. 1958, P. U. F.》(P. L. G., I, p.258 note)。

- 21) R. Jakobson, *Essais...op. cit.*, p.176 note.
- 22) (5)はそれ自体、同著者の別の研究の部分的要約であり、それらに対してテキスト間関係性を有する。パンヴニストが、いわゆる《三人称》について「それは人称に差し向けない動詞（又は代名詞）パラダイグムの形態である」という時、動詞については主として《動詞における人称関係の構造》(1946) (*P. L. G.*, I, ch. XVIII)の、代名詞については、《代名詞の本性》(1956) (ch. XX)の言説がそれぞれここで《吸収》要約されている。
- 23) J. L. Austin, *How to Do Things with Words* (Oxford, 1960); 坂本百大訳『言語と行為』(大修館, 1978); なお G. Lane による仏訳は *Quand dire, c'est faire* (Paris, 1970).
- 24) 「《私》を含む言表は、チュールズ・モリスが《語用論的》pragmatique と呼ぶ言語レベル或いはタイプに属する。それは記号と共に記号を用いる人々を引込むのである」(*La nature des pronoms*), *P. L. G.*, I, p.252).
- 25) J. L. Austin, 《Performatif: Constatif》, dans *La Philosophie analytique* (Cahiers de Royaumont, Philosophie, N° IV), Paris, Éd. de Minuit. 1962. Voir *P. L. G.*, I, ch. XXII 《La philosophie analytique et le langage》.
- 26) この条件あるいは文法的規準の有効性と限界については、『言語と行為』第一講, p. 9以下; J. L. Austin, 《Performative Utterances》, pp. 235, 241-242 in *Philosophical Papers*, Second Ed. (Oxford Univ. Press, 1970) 参照。
- 27) パンヴニストは、この論文において *langue/langage* の区別を強調する (p.259) しかし「個別的諸言語の事実は、一致し合う時には *langage* のために証言する」(p.261) と述べて、後者における主観性解明のための第一の支えとして、諸言語における《人称代名詞》の存在、機能、本性を検討するのである。ソスユールを越えてデカルトやフンボルトを考えさせる彼の *langage* 観、*langue/langage* の区別と関連については *P. L. G.*, I, ch. II, p.19 を見よ。本文に引用した《人間の能力》…としての *langage* の定義はそこより取られている。
- 28) Benveniste, 《La philosophie analytique et le langage》, *op. cit.*, p.270-271。3は原註で、勿論《De la subjectivité dans le langage》(1958) への参照指示。
- 29) J. L. Austin, *Philosophical Papers*, *op. cit.*, “Foreword” (J. O. Urmson, G. J. Warnock), p. V. 「緒言」は、これが『ロワイヨーン冊子』で出版されたこと、その内容は “Performative Utterances” に酷似 (closely similar) していること、またそれは英訳でも出版されたことを付け加えている。
- 30) A. G. Greimas, J. Courtés, *Sémiotique, dictionnaire raisonné de la théorie du langage*, art. “Performatif”, p.272 b (Hachette, 1979).
- 31) 虚構の言説ではイオネスコの『犀』にいくつかこの事例がみられる。ちなみに、この *Rhinocéros* は Ionesco と同じ順序で i-o-e-o なる母音を並べた語であって《不完全な形》のアナグラム、ソスユールのいわゆる《anaphonie》を実現している。( *op. cit.*, p.27-29). Io- の [jɔ-] への変化を別にすれば、そこに、《hypogramme》の意味の一つである一種の署名 (ソスユールは《hypogramme》からこの語義を排除している, *op. cit.*, p.30) を読むこともできよう。この点におけるアナグラム理論の拡大の可



能性については, R. Jakobson, L. G. Jones, Shakespeare's verbal art in 《Th' expence of spirit》 (1970); trad. fr. in *Questions de poétique, op. cit.*, p.374-375 参照。

文献その他に関して, 鷺見洋一, 村上勝三両氏のお世話になった。感謝申し上げたい。